

事例報告「生命尊重の心を育む動物飼育」

Animal Breeding Education to have a respect for Life

町井富子



1 「生命」への気付きの重要性

「生きる」と「死ぬ」ことについて、子供たちはどのような認識をもっているのか。発達段階をふまえて、親は教師は子供にどのようなかかわりをしてきたのだろうか。自分や家族が「生きている」とはどんなことなのか、また「死ぬ」ということについて、子供たちと真剣に向き合ってきたのだろうか。

「何をどうやって教えればいいのか分からない」という理由、また「命が大切なんてあたりまえじやない。そんなの自然に気付くはず」と考えられていて、十分ではなかったように思われる。

昔のように自分の家に家畜を飼い、家畜と共に生活し、自分の家族と同じように大切に育ててきた馬や牛が死んでしまった時の悲しさ、そして、家族の悲しみを体験しているなら、「生命」の尊さに気付くことができるであろう。しかし、核家族が多い現代、近所どうしのかかわりも少なく、家族の死に直面することが全くないまま大人になっている子が、どうやって

「死」の悲しみを自分とのかかわりで考えることができるであろうか。

「生命」というものは、具体的に目に見える物ではないので、体験を通して気付かせ、自分の問題として考えられるようにしなければならない。

2 動物と共に生きることから「生命尊重の心を育む」

(1) 子牛飼育体験から

生後1ヶ月の乳牛（ホルスタイン）を学校で1年生と飼育してみた。この子牛は生後すぐ母親から離されるため、母親が恋しくて、育てくれる人を親牛のように慕うのである。また、生後1ヶ月の牛は、ミルクを飲むとき一息に飲んでしまうので、胃袋に

必要な唾液が不足してしまう、そのため、ミルクを飲ませた後、子牛の口の中に手を入れて、手や指を吸わせるのであるが、この指を吸われるという感覚が感動の体験となる。1年生であっても、子牛の母親になってしまうほどの情の湧く体験なのである。また、毎日子牛とかかわっていくうちに動物の肌のぬくもりから安心感を得、心と心がかよい合い、家族のような愛情が湧いてくる。子供たちは、動物のことが気になって気になって仕方なくなり、自分から進んで餌をやったり小屋の掃除をしたりする。また、うんちなどの様子から健康状態が分かるようになる。

子供自ら他教科と関連させていく場面も見られる。教室の前に牛小屋があるので、国語の教科書は、子牛のもちゃんのために読んであげたくなる。赤ちゃん牛のために読むのであるから、優しく感情のこもった読み方をするのである。そして、語りかけるように柔らかい読み方ができるようになる。また、可愛い子牛のことを家族に知らせたくて、自分から文を書くようになる。音楽の時間には、子牛のもちゃんの替え歌を歌いながら、多様な身体表現ができるようになる。

<感動の体験は子供を変えた>

牛の世話、特にミルクを飲ませるときの体験がきっかけとなり、27名全員の気持ちを変えた。子牛への親しみが、愛情へと変わっていった。ミルクを飲ませた後、子牛がお腹をこわさないように口の中に指を入れ、指を吸わせ、唾液ができるようにしてあげのだが、子供は子牛の口の中の温かさで、「生きている」ことを実感する。さらに、子牛に指を吸われるその感覚は「生命」の感覚である。子牛のミルクを飲みたい、母親のお乳を飲みたいという強い思いが、指から伝わってくる。

子供たちは、子牛の「生命」の躍動を感じ取る。そして、自分を慕ってくる子牛が可愛くて、母親、父親になった気分で、自分のことより子牛のことを心配するようになった。

子供たちは、子牛が生きていることを実感した。生きている動物が自分を慕っている。赤ちゃん牛なので、自分たちが世話をしなければ、何もできないことが良く分かると、自分のことより、子牛のことを考えるようになる。自分が雨に濡れても子牛が濡れないようにビニルシートをかけたり、臭いんちもスコップで取ったりできるようになる。生きてい

る動物のためでなかつたら、うんちを始末したりするだろうか。命あるものへの思いがあるから、守つてあげたいという気持ちがあるからできることなのである。この体験後、友達の立場に立つて考えることができるようにになった。

3 うさぎとのふれあいから

—生活科の実践事例 2—

—第1学年単元名「いのちってあったか!」—

(1) 単元の目標

生き物の好きな場所や好きな食べ物を調べたり、遊んだりする活動をとおして、生き物に親しみをもち、自分たちと同じように命があつて生きているということに気付くことができる。

(2) 評価規準

① 生活への関心・意欲・態度

- ・生き物と毎日かかわり、愛情をもつて世話をし、育てようとしている。

② 生活や体験についての思考・表現

- ・生き物の住んでいる場所の様子をよく観察し、どうしたら生き物が住みやすいかを考えながら世話をすることができます。

③ 身近な環境や自分自身への気付き

- ・生き物には命があり生きていることや、成長していることに気付き、生き物を大切にすることができます。

(3) 本単元で育てる生命尊重の心

生物が懸命に生きようとしている姿は、見る物全てに感動を与える。それは自分たち人間の生きようとする力、生命の躍動と重ねて考えるからである。また、命あるものを大切にしようとするのは、我々人間の生きようとする意欲と同じ力やはたらきを示しているからである。自分たちの命を大切にしなければならないという心が、生命あるもの全てを大切にしようとする心に通じるのである。

1年生は生活経験も乏しく、抽象的な思考もまだ未発達で、生きているものと、生きていないものの違いや、生命があることの意味が明確に認識されていないことが多い。そのために、生き物に対しても、関心のあるものだけを大切にしたり、関心が持続しなかつたりと、自己中心的な対応の仕方があることがある。

「生き物には命がある」ということを気付かせ、生き物を大切にする気持ちをもたせることは容易なことではない。動いている生き物を見て、「生きているよ」と答えるかもしれないが、アメリカザリガニと遊んでいてもカブトムシと遊んでいても、すぐ飽きてしまい生き物をそのまま置き去りにしてしまいかがちである。

毎日かかわり、自分が食事をする時でも自分が大

切に育てている生き物のことが気になって気になつて仕方がない、というようになるまでかかわらせないと、本当の愛情が湧かないるのである。

本単元では、動物の体の温かさから発展し、人間の体と体がふれあつたときの温かさ、そして安心感などから極めて当たり前の「生きている証」を実感させたい。そしてそのことに喜びを見いだすことによって生命の大切さを自覚させたいと考えた。

(4) 展開

① 学校の周りを散歩し、「生きている物」を見付けさせる。

・壁面に模造紙を貼って準備をしておくと「生きている物」を見つけた時、いつでも自由に掲示することができる。子供たちは、自然に生き物への関心が高まっていくのである。



＜探してきたトンボやミツバチの絵をかき、好きな場所に貼り付ける。＞

② うさぎは生きているから温かいことに気付くようになる。

・うさぎと教室で毎日一緒に生活していると、「うさぎのミミちゃんにも分かるようにちゃんと読んであげるからね。」「給食を食べたらぼくがタンポポの葉っぱ取ってくるからね。」などと、話しかけるようになる。



＜うさぎと心のふれあいができたところで、獣医さんと一緒に、聴診器を使ってうさぎの心臓の音を聞く。＞

- ③ 友達と一緒にいるから心が温かくなることに気付かせる。
- ・友達と握手をしてみて、手と手をつないでいると安心し、なぜか優しい気持ちになることに気付かせる。
 - ・友達の心音と自分の心音を比べたり、うさぎの心音と自分の心音を比較したりさせることで、うさぎも自分と同じように生きていることに気付かせる。



＜友達の心臓の音と自分の心臓の音を聴診器で聴いて比べてみる。＞

- ・「家に帰ってからお父さんやお母さん、おじいちゃんやおばあちゃんなどに、おんぶやだっこをしてもらうこと」という宿題を出し、家族とのふれあいの中で、自分は家族に守られているということを気付かせる。
- ・みんなが一緒にいるから楽しいことに気付かせる。また、死んでしまうと家族や友達みんなが悲しむことにも気付かせる。



＜お母さんにおんぶしてもらい満足な笑顔＞

- ⑤ 血液が流れている模型を見せ、話し合う
- ・血液が流れている模型を見せ、人間の体には血が流れていることが分かるようとする。体を傷つけると、血がたくさん出て死んでしまうことに気付かせた後、もし、交通事故などで怪我をしたり、死んでしまったらどうなってしまうのかを考えさせ、話し合う。
 - ・教師は、子供の言葉を温かく受け止め、そうだ〇〇ちゃんよくき気付いたね」と共感し、怪我をしたり、死んでしまったりしたらとても悲しむ人がたくさんいること、自分は毎日みんなに心配してもらっているのだということが分かるように、ゆっくり語りかけるように話してやる。



4 おわりに

動物の体の温かさや家族の愛情に安心感を覚え、うさぎの心音や自分の心音に感動し、「命」を体感することができた。「命」に目を向けることができた子供たちは、相手の立場に立って物事が考えられるようになり、思いやりの心が育った。

(栃木県茂木町立木幡小学校教諭)

